『雁の草子』にみる異類婚姻譚の悲恋
――狐女房譚との比較を中心に――

大坪俊介

はじめに

人間と異類の交流は、古来より説話や御伽草子等の文学作品の題材として好まれてきた。その交流の形態の一つとして、人間と異類による恋愛、もしくは婚姻を描いた一群の作品がある。古くは『日本霊異記』上巻第二縁の狐女房譚に始まるこの流れの中に、本論文で取り上げる御伽草子『雁の草子』も存在している。『雁の草子』は題名どおり人間と雁による異類婚を描いた作品であり、同様に人間と異類の婚姻を描いている御伽草子としては、『いなり妻の草子』『浦島太郎』『狐の草子』『木幡狐』『玉水物語』『鶴の草子』『鼠草子』[1]『蛤の草紙』など多くの作品が挙げられる。[2]

これらの御伽草子では、良縁を求めた主人公（人間）のもとへの異類の（主に人間に変化した状態での）訪れ、二人による恋愛や婚姻、そしてなんらかの原因による別れ（異類の正体露見やその死によるとされることが多い）、さらには、主人公あるいは主人公と異類との間になされた子供のその後の栄華が主に共通して描かれており、そのほとんどは先に挙げた『日本霊異記』の狐女房譚の話型を継承しているといってよい。

また、御伽草子における異類婚姻譚の異類の正体は雁、鼠、狐など様々であるが、その正体が話の展開に関わってくることもあり、各作品の比較に際しては異類婚姻譚以外の文学作品においてそれぞれの異類がどのような扱いを受けているのかを知る必要がある。『雁の草子』の先行研究としては坂口博規氏[3]や島内景二氏[4]の論などがあるが、従来の研究では『雁の草子』における先行文芸の影響に焦点が当てられ議論されており、『雁の草子』の異類婚姻譚的位置付けが十分になされてきたとはいい難い。

そこで本論文では、御伽草子における異類婚姻譚について、『雁の草子』を軸として、先行文芸の影響を確認しつつ、多くの異類婚姻譚にも共通し、特に狐女房譚においてひときわ情緒的に描かれることが多い悲恋的な展開に着目し、その展開について比較しながら考察していくものとする。

一　御伽草子『雁の草子』

御伽草子『雁の草子』の伝本として現存するのは京都大学附属図書館蔵の白描絵巻一軸のみで、本文は漢字交り平仮名文で書かれている。誤写や脱字と思われる箇所が複数存在するが、本論に大きく関わる部分ではないので、ここでは関係する箇所で多少取り上げる程度にしておく。挿絵は計六図あり、絵の中にも詞書がみられる。奥書に「慶長七年六月中旬ニ書之」とあることから、慶長七年（一六〇二）の写本と考えられる。作品の成立は室町末期頃と思われるが、[5]内題もなく、題簽もないため、本来この御伽草子にどのような題名が付けられていたかは不明で、現在の『雁の草子』の題は、昭和十五年京都大学から複製本が刊行された際に便宜上につけられた題が通称となったものである。[6]この『雁の草子』という題について、一般には「かりのそうし」と発音されているが、島内氏は「この物語の本文で、「雁」のことはほぼ一貫して「かりがね」と表記されているので、「かりがねのそうし」あるいは「かりがねそうし」

と発音するのが自然ではないかとも考える」と提唱されている。[7] このような発音の問題はあるにしろ、その内容が雁を中心とした悲恋譚・異類婚姻譚である以上、題が『雁の草子』と表記されることに問題はないだろう。そのあらすじについて簡単にまとめておく。

堀河辺の生上達部の娘は宮中に仕えていたが、両親もこの世を去り、頼るものもなく憂いに満ちた日々を過ごしていた。娘はある年の八月に石山観音に参詣するが、その際に見た並んで飛ぶ雁の睦まじさをうらやみ、たとえ鳥でもいいから心から契ってくれるものがあればと思う。そんな折、娘のもとに越路の兵衛佐秋春と名乗る狩装束の男が現れ、やがて娘はこの男と深く契るようになる。男は敵をもつ身であると語り、夜にしか現れなかったので、娘は怪しく思う。そして、三月十日過ぎの夜、男は帰郷の旨を娘に告げ、秋の再会を約して姿を消す。翌朝、軒より飛び去る雁を見て、娘は男の正体を悟る。それからしばらく経ったある夜、娘は雁の夢を見るが、目を覚ますと夢の中で雁に届けられたはずの玉章が実際に枕元にあり、男に変化していた雁が狩人によって射殺されてしまったことを知る。その後、娘は乳母とともに墨染めの衣をまとい、越路を訪ねて草庵を結び修行をし、ついには往生の素懐を遂げる。

以上が『雁の草子』の概要である。一読して、『雁の草子』が悲恋譚・異類婚姻譚として描かれていることがわかるだろう。なお、『雁の草子』本文は京都大学電子図書館・貴重資料画像によって確認し、[8] また『室町時代物語集』上に所収の市古貞次氏校注『雁の草子』翻刻を特に参考にした。[9]

二　先行文芸の影響

『雁の草子』の悲恋譚・異類婚姻譚としての内容の検討に入る前に、先行文芸の影響について確認しておく。

先行研究でも指摘されているように、[10] 『雁の草子』には様々な歌や故事が引かれている。まずは『雁の草子』において歌を引いていると思われる箇所を挙げる。もちろん、それぞれの箇所が個々の歌からのみ影響を受けているわけではなく、多くの歌に使われている語を参考にしていたものと考えられるが、ここでは該当箇所に対して一例ずつ歌を挙げながら、順に見ていくことにする。

	『雁の草子』の引用箇所	引用された歌
①	あまの子にて宿も定め候はぬ	白波の寄するなぎさに世をすぐす海人の子なれば宿も定めず（『和漢朗詠集』遊女）
②	まことに草の縁尋ね給はば	かこつべきゆゑを知らねばおぼつかないかなる草のゆかりなるらん（『源氏物語』若紫巻）
③	浮草の誘ふ水あらばと思ふ身なれば	わびぬれば身をうき草の根を絶えて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ（『古今和歌集』雑下　小野小町）
④	つれなき秋のころにやと	過ぎ行くかつれなき秋の心かな恋しかるべき野べのけしきを（『玉葉和歌集』秋下）
⑤	賤が垣根の梅までも	夕顔の花のかつらやあらでくむ賤が垣ほのねりぞなるらむ（『草根集』夏）
⑥	我心にもあらぢ山、雪霰にも誘はれさせ給はば	八田の野の浅芽色づくあらぢ山峰の泡雪寒く降るらし（『万葉集』巻十）
⑦	烏羽玉の夜の衣かへしつゝ	いとせめて恋しき時はむば玉の夜の衣を返してぞきる（『古今和歌集』恋二　小野小町）
⑧	飽かずして見捨てて出し雁の花より先に散るぞ悲しき	なれて憂き後の別れを思へばや花より先に雁の行くらむ（『新拾遺和歌集』雑上）
⑨	夏かりの玉江の葦の下隠れに	夏かりの玉江のあしをふみしだきむれゐる鳥の立つ空ぞなき（『後拾遺和歌集』夏）
⑩	世の中にかゝれとてこそ生れけめ理知らぬわが泪かな	うき世にはかゝれとてこそ生まれけめことわり知らぬ我が涙かな（万代和歌集』雑六）

①は男（雁）がはじめて尋ねてきた場面での女の言葉で、女が頼る者のない身を仄めかした言葉である。[11]『和漢朗詠集』の歌もさすらいの身にある遊女によるものだから、きちんと歌の内容を踏まえた上での引用といえるだろう。②は『源氏物語』若紫巻などから引いた言葉で、『雁の草子』では女と男とのふとした縁のことを「草の縁」と喩える場面である。ここで挙げた『源氏物語』の例は紫上を「草のゆかり」と喩える源氏への紫上自身の返歌であるから、やはりある程度歌の内容を踏まえた上での引用だと思われる。③は『古今和歌集』による歌で、『雁の草子』ではこれもまた女のわびしい身の上を示すために使われている箇所である。『古今和歌集』の歌は文屋康秀からの任国を見に来ないかという誘いに対する小野小町の返歌であり、浮き草のような身ですが誘ってくださるならば、という内容の歌である。頼る者のない女が男の情にほだされる場面とは一致しているといえる。④は自らの住居も明かさない男に対する女の恨み言で、『玉葉和歌集』の歌などを引くかと思われる。ただし、『雁の草子』本文を見ると「秋のこころ」ではなく「秋のころ」と読める箇所であり、この歌と関連付けてよいものかは慎重にならなければならない。⑤は『草根集』にある歌などを思わせる引用であり、『雁の草子』では女の家における春の趣を表す箇所である。ただし、坂口氏が指摘するように、「賤が垣根の梅」は春の風趣を詠むのに好まれた歌材であるから、『草根集』の歌だけによるとは考えづらい。[12]特定の歌から引かれたというより、一情景を表す語として引かれたと見るべきだろう。⑥は『万葉集』などにもよくみられる歌枕「あらち山」を使ったもので、『雁の草子』では故郷へ帰るという男の心情を女が推測する場面で使われている。あらち山という地名と「我が心にあらじ」をかけたもので、北国に行った人を偲んで詠まれた歌と思われるから、場面とも一致しているといってよい。⑦は、『雁の草子』では男と別れた後、せめて夢でいいから会いたいものだという女の心情を表す言葉の一部で、『古今和歌集』などから引く。市古氏が指摘されているように、[13]衣を裏返しに着て寝ると夢に思い人が登場するという俗信があり、まさにそれを期待する箇所であるといえるだろう。⑧は男の手紙に書かれた歌であり、『新拾遺和歌集』などの歌を引く。『雁の草子』では、不本意ながら死に別れることとなった男の心情を示している。例に挙げた『新拾遺和歌集』の歌は雁と花との別れを詠ったものであり、後の別れを思うがゆえに花が散る前に雁は帰っていくのだといっている。『雁の草子』では逆に花よりも先に自分が散ってしまったということを詠っているが、花との別れを嘆く点では共通する。⑨は『後拾遺和歌集』などの歌を引き、『雁の草子』では越路へと向かう女の修行の道行きの場面で使われている。『後拾遺和歌集』の歌は飛び立ちかねている鳥の哀れな様子を詠んだものであり、『雁の草子』では女の道行き風景に「夏かり」と「雁」を掛けて引用されているため、場面に映える引用となっている。⑩は『雁の草子』では出家して暮らす女の詠んだ歌で、前世からの因縁でこうなったことを感じ入る場面である。他の箇所と違い、ほぼ『万代和歌集』の歌を丸ごと引用しているため、歌の大意はほとんど同じだといえる。このように、『雁の草子』では多くの場面で先行文芸に見られるような歌や歌材を引用し、それぞれの場面がより引き立つように配置されているといえる。

続けて、故事などを引いてきている箇所に着目する。

先の比較と同様に、順に故事の影響を見ていく。①は白居易の歌を引く箇所である。月の光の下、白居易が遠方にいる友人を思って詠んだ歌で、『源氏物語』須磨巻にも引かれる歌だが、『雁の草子』では友人や都を思うのではなく、ただ女の頼る身のない切なさを描写する場面に引用されている。どちらかといえば内容よりも情景に一致するからと引用された箇所だろう。②は『雁の草子』本文を見ると「ふうふゑんあまのちぎり」となっているが、内容的にも「夫婦鴛鴦の契り」と解釈すべきところで

	『雁の草子』の引用箇所	引用された故事や歌
①	八月のいと隈なく千里の外までも思ひやらるゝばかり成	白居易の歌「八月十五夜禁中獨直、対月憶元九」
②	夫婦ゑんあうの契り浅からず	鴛鴦の契りの故事
③	我は越路の兵衛佐秋春と申候者なり	秋に来て春に帰るという雁の動物的習性
④	もし葛城の辺りに住む人やらん	『古事記』などに見られる葛城一言主の大神の故事
⑤	蘇武はうち漏らされ、かひなき命ばかり長らへ	『漢書』列伝二十四にある蘇武の故事

あろう。『雁の草子』では一列になって飛ぶ雁を女が羨ましく見つめる場面である。鴛鴦すなわちおしどりは古来より仲睦まじい夫婦の喩として使われており、またこの後女は雁と夫婦になるわけだから、適切な引用であるといえるだろう。③については、島内氏が「「秋春」とあるのは、雁は秋に我が国に飛来して翌年の春に帰国することになっているからです」と述べているように[14]、雁の秋に来て春帰っていく習性から命名されたものだろう。④は『古事記』に見られる葛城一言主の大神の故事を指しているのだと思われるが、『古事記』の例では「吾者雖二悪事一而一言雖二善事一而一言々離之神葛城一言主之大神者也」と、善きにつけ悪しきにつけ一言で表すから一言主の大神というのだということが語られているだけである。この神については『日本霊異記』『今昔物語集』『三宝絵』などに記述があり、役行者に調伏され葛城山と金峰山の間に橋を作るよう命じられた一言主の神が、自分の醜い姿を恥じて夜だけ仕事をしようとした、という説話などがそれぞれ記述されている。『雁の草子』ではこれらの説話から引用された箇所だろう。昼は姿を現さず、夜な夜な通ってくる男を怪しむ言葉であるが、自らの醜い容姿を恥じたという一言主の神の伝承の内容をうまく利用した引用とはいえず、表面的な引用にとどまっている感がある箇所である。⑤は『漢書』列伝二十四にあり、日本でも『平家物語』『今昔物語集』『宝物集』など多くの作品に収録されている蘇武の故事を引く箇所と考えられる。簡単に故事の内容をまとめると、

漢の武帝は匈奴との争いに際して蘇武を遣わすが、その際の争いで蘇武は匈奴に捕まり、囚われの身になってしまう。しかし、蘇武は武人としての誇りを忘れず、匈奴に下ることなく過ごす。あるとき、蘇武は漢に帰る雁を見て、せめてこの雁が届けてくれるならと足に手紙をつけたところ、それが漢王の庭に落とされ、ついには故郷に戻ることが出来た。

というものである。ただし、原典となる『漢書』では蘇武が使者として匈奴に遣わされているのに対し、日本における蘇武譚では蘇武は将軍として匈奴と戦うために遣わされたとされることが多い。また、『漢書』では蘇武が死んだと嘘をつく匈奴に対し、使者が機転を利かせて雁に託された手紙の話を創作したことになっているが、『平家物語』をはじめとする日本における蘇武譚のほとんどでは実際に雁が手紙を届けたことになっている[15]。この蘇武の故事から、「雁書」等の言葉も生まれ、雁は広く手紙を届ける生き物として扱われることとなった。『雁の草子』では日本における蘇武譚の内容に準拠する形で引用されているが、いずれにしても雁が手紙を届ける生き物だとされたことと、そのために心あるものだとされる点が重要である。『雁の草子』は、一度別れた二人が、夢枕で渡された手紙によって再度別れることが描かれるという、別れの場面が強調されている作品である。蘇武の故事を引いてきたのは、雁が夢枕で手紙を届けるという事態に説得力を持たせるためであり、さらにいうならば作者はあらかじめこの蘇武譚を念頭において『雁の草子』を創作したものだろう。

三　異類婚姻譚としての『雁の草子』

異類婚姻譚は、異類が男で人間が女の異類婿型と、異類が女で人間が男の異類女房型の二つに大きく分けることができる。『雁の草子』をはじめとする異類婿型について、男女間の恋愛や別れに焦点が当てられる悲恋型（『雁の草子』『鼠の草子』など）、夜な夜な通ってくる異類の正体を図らずも暴くことになる蛇婿型（三輪山伝承[16]など）、不本意に異類に嫁いだ女がそれを撃退する巧智型（猿婿入りなど）の三つに細分し、その話型の比較を行なうことにする。なお、異類婚姻譚は、出会い、恋愛及び婚姻、妊娠や子供の誕生、別れ、結末のおおよそ五場面から成り立っていることが多いので、以下、話型の比較に際してはこの五場面をそれぞれ比較することにする。

まず①の出会いの場面を見ると、悲恋型は最初からよい異性の存在を願うという形で、いきなり異類婚に向かう形で物語が始まっていることがわかる。次に、②の恋愛及び婚姻では、巧智型以外では男女はおおよそ相思相愛の形で描かれ、特に夜のみ姿を現すとされやすいことがわかる。③の妊娠や子供の誕生については、蛇婿型では若干特殊な形で触れられているものの、一般には異類婿型では子供の事は書かれない事が多いことがわかる。続いて④の別れの場面をみると、姿の垣間見、もしくはほかの動物（たとえば犬や猫）によって異類が正体を現す場合がほとんどということで、このあたりは異類女房型とそれほど変わらないようだ。⑤の結末については、悲恋型のみ女が異類に対して未練があるように書かれることが多いが、蛇婿型、巧智型では異類を撃退できてめでたしめでたしとなることがほとんどである。巧智型では異類が異類の姿のまま人間と婚姻するという他の異類婚ではあまりみられない特徴があり、また蛇婿型では異類が死に際に「自分が死んでも（女の）お腹にいる息子がいずれ敵を討つ」と語るなど、異類婿型の異類たちは人間世界への敵対的・侵略者的側面を大きく持っている。これらの理由から、異類婿型では異類が撃退すべき対象として描かれることが多いのだろう。

場面	悲恋型	蛇婿型	巧智型
①出会い	年ごろの娘（もしくは親）が良縁を願い、そこに異類の変化した男が現れる	描かれないことが多い	人間が異類に畑仕事の手伝いなどを頼むかわりに娘の誰かを紹介する約束をする
②恋愛及び婚姻	男は夜な夜な娘のもとに通う（または男の屋敷に娘が嫁入りする）	娘のもとに夜な夜な男が通ってくる	上の娘たちは嫌がるが、末娘が了承し異類のもとに嫁ぐ
③妊娠や子供の誕生	特に描かれない	息も絶え絶えな異類によって（④参照）娘が身ごもっていることが語られる	特に描かれない
④別れ	他の動物（犬など）や垣間見によって男は異類の正体を現し、娘のもとを去っていく	怪しく思った両親が男の服の裾の針により、異類の正体が判明すると同時に異類は死ぬ	里帰りの際の娘の機転により、異類は死ぬ
⑤結末	女は男の正体を知って我が身を浅ましく思う（異類への愛情が深く悩む場合もある）。異類（もしくは女）は出家して往生を願う	異類の子供を消すために、娘は節句の度にお酒を飲まなければならなくなる	異類の死により娘は実家に戻り、親子で平和に暮らす

異類女房型については、悲恋型や恩返し型に分類することが出来る。ここでは、異類女房・悲恋型について、悲恋型で描かれることが多い狐女房譚の平均的話型を挙げ、異類婿・悲恋型の作品である『雁の草子』との比較を行なうことにする。

場面	狐女房譚	『雁の草子』
①出会い	良縁を求めていた男女が出会う	石山観音に参詣した娘のもとに男が現れる
②恋愛及び婚姻	男は女を屋敷に連れて帰り、夫婦として暮らし始める	男は夜な夜な娘のもとに通い、娘は男が夜しか現れないことを怪しく思いつつも深く契るようになる
③妊娠や子供の誕生	多くの場合、やがて女は妊娠し、男子を産む（子供はなんらかの特殊な力を持っているとされることが多い）	特に描かれない
④別れ	犬などによって女は正体を現し、夫や子供との別れを嘆きつつ去っていく。夫や子供は異類の正体を知っても愛情深く、嘆き悲しむ	帰郷の時期が来たため、男は雁の仲間とともに娘のもとを去らなくてはならない。別れを交わした翌朝、軒下から飛び立つ雁を見て、女は男の正体を悟る
⑤結末	男や子供の嘆き悲しむ様を見た女は、その後も度々通ってくる。男や子供の末繁盛が語られる（異類の出家が描かれることもある）	その後、夢枕で男の死を知った女は、出家をして往生の素懐を遂げる

①の良縁を求める男女の出会いという点ではほぼ共通するが、同じ悲恋型でもその後の展開はかなり違う。②の恋愛及び婚姻については、狐女房譚では女が男の家で暮らし始めているのに対し、『雁の草子』では男が夜な夜な女の家に通う形で描かれている。『雁の草子』の婚姻形態は、どちらかというと蛇婿型の影響を受ける形で描かれ、女にとって男は謎めいた存在のまま物語が進むことになる。③の妊娠や子供の誕生については、狐女房譚では子供の誕生が描かれることが多いのに対し、『雁の草子』では子供に関する記述が一切ないというのが大きな違いといえる。もちろん、狐女房譚でも子供の誕生が描かれないものもあるが[17]、子供の誕生が描かれる場合、どうしても筆がそちらに割かれることになり、また、人間と異類の間に生まれた子供はその特殊な出生により不思議な力を持っていることが多いから、狐女房譚には始祖説話・出生譚的性質を持ったものも多い[18]。加えて、二人の間に子供が存在すると、夫婦（恋人）の別れを描く悲恋譚であると同時に、どうしても子別れの要素も大きく取り上げられることになる[19]。血を分けた子供との別れが追加されることで、物語がより哀切に描かれるのである。子供の有無は、悲恋型の異類婚姻譚を見る際に大きな要素の一つであるといえるだろう。④の別れは、狐女房譚、『雁の草子』ともに正体の露呈が絡んでいる。しかし、狐女房譚では犬などによって異類の正体（狐）が露呈したから去っていくのに対し、『雁の草子』では（雁が渡る）時期が来たから一時的に去らねばならないという事情が先にあって、故意にしろ偶然にしろ女が異類の正体（雁）を知ったこと自体が別れのきっかけになっているわけではない。むしろ、秋に来て春帰っていくという雁の習性こそが別れのきっかけとなっている。秋に来て春に帰っていくという雁の性質は古来より多くの和歌に詠まれ[20]、「春かすみたつを見すててゆく雁は花なき里にすみやならへる」（『古今和歌集』春上）「春くれば雁帰るなり白雲の道ゆきぶりに言やつてまし」（『古今和歌集』春上）「かけて待つ誰か玉章はなけれども秋をたのむの雁もきにけり」（『宝治百首』秋）など、例を挙げるにいとまがない。この一度目の別れに雁という動物の性質が大きく関わってくるという点が重要であり、また、この際に男の正体が雁であると露呈したことが、『雁の草子』をより情緒的な悲恋譚たらしめている二度目の別れに大きく関わってくることになる。狐であるから犬とは共存できず去るしかない、あるいは雁であるから春には去るしかない。しかし、異類、人間ともに情が残っているから、浅ましく思いつつも別れ

がたい。異類の正体による物語への影響が大きく見られるのはやはりこの別れの場面であるといえる。⑤の結末は、狐女房譚では異類が去った後の（子供の特殊な能力や異類の加護による）夫や子供の栄華が描かれ、また去ったはずの異類も度々顔を出すという、悲恋型とは言いつつもある種のハッピーエンドとなっていることが多い。一方の『雁の草子』では、男の正体を知りつつも夢でもいいから会いたいと願う女に対し、願った通りの夢枕におかれた手紙によって、しかし願いとは裏腹に二度目の（しかも今度は死という完全な）別れが提示され、女は雁の後世を願って出家するという形で物語が描かれている。

同じ悲恋型の異類婚姻譚であっても、『雁の草子』がより悲恋譚として突出しているのは、この二度の別れという点にあると思われる。一度目の別れは雁の動物的習性によるもので、それは先に述べた通り多くの和歌などに詠まれていることである。坂口氏は「『雁の草子』の場合に言及し得るのは、雁が詠まれた和歌の有する情趣の伝統がそのままこの物語草子に流入し、主題と関わって色濃く哀切たる調子を伝えている」と述べているし[21]、市古氏も「このやうな平安朝以來の文學者達に最も愛された雁を、古歌を参照しながら、擬人化しようといふ試みは、當然起こってよいはずであった。本書はそれである」と述べている[22]。そして二度目の別れは夢の中で届いた玉章で伝えられた雁の死によるものであった。秋に来て春帰るという、和歌にも詠み込まれる動物的習性と、蘇武譚などに見られるような消息・通信に関係する伝承を持つという文学的性質がそれぞれの別れを招いている。一度目の別れは読者に予測し得ても、二度目の別れは読者には予測し得なかった。しかも、決して理不尽な別れではなく、蘇武の故事などからうまく説明をつけられた展開としてである。あるいは、二度目の別れには、雁などの鳥が常世国との仲立ちをする生き物だという古代信仰の影響もあったかもしれない。雁という異類でしか成しえない、雁の性質を両面でうまく取り込んだ悲恋譚を描いたことが、この『雁の草子』の一番の功績だといえるだろう。

四　おわりに

異類婚姻譚では、人間と異類（異界）が接するという性質上、話の最後では必ず人間と異類の別れが描かれる。異類は正体を現すか、あるいは死ぬことによって自らの異界に帰っていかなければならない。その別れが、「無事に異類を撃退できてめでたしめでたし」となるならば巧智型や蛇婿型の作品となるし、逆に「異類であっても一時は愛情を交わした仲なのだから別れがたい」となれば悲恋型の作品となる。

本論文で取り上げた『雁の草子』は、様々な先行文芸の影響を受けつつ成立した作品である。良縁を求めた結果として夜な夜な通ってくる（異類の）男が現れるという、古来よりの神婚譚の影響を色濃く受け継いだ出会いの場面から、雁の性質をうまく取り込んで語られる別れの場面まで、多くの歌や故事が引かれ、展開に花を添えている。また、飛び立つ雁の姿によって異類であった男の正体を女が悟り、さらに夢枕で男（異類）の死を知るという二重構造で別れの場面が描かれており、悲恋譚としての味わいをいっそう引き出しているといえる。狐女房譚は、子別れ、もしくは夫婦間の愛情に焦点を当てる形で異類婚の悲恋を描いてきたが、『雁の草子』は特に別れの場面に力を入れることで、異類婚における悲恋の新たな描き方を模索してみせたということが出来るだろう。

註

(1)『鼠の草子』の名がつく同名別内容の御伽草子は三作品存在するが、うち二作品が異類婚姻譚となっている。

(2)ここでは動物との異類婚を描いた御伽草子を挙げたが、その他にも植物や器物などとの婚姻を描いたものが存在している。

(3)坂口博規「『雁の草子』に見る物語草子制作の問題」（「駒沢国文」第十号　一九七三年六月）。
(4)島内景二「御伽草子『雁の草子』の世界――注釈的な現代語訳の試み――」（「電気通信大学紀要」八巻二号　一九九五年十二月）
(5)市古貞次校注『雁の草子』（『室町物語集』上　新日本古典文学大系五四　一九八九年七月）や『御伽草子事典』（二〇〇二年九月　東京堂出版）で成立を室町末期としているのでそれらを参考にした。
(6)玻璃版複製で、昭和十五（一九四〇）年十一月に作成された。藤井乙男氏による解説を伴う翻刻の別冊が付されている。
(7)(4)に同じ。
(8)画像化された『雁のさうし』を確認させていただいた。
(9)(5)の市古貞次校注『雁の草子』（『室町物語集』上）に同じ。以下、『雁の草子』本文を引用する場合はこれによる。
(10)(3)、(4)などで指摘。
(11)『新古今和歌集』雑下にも同じ歌が見える。また、『源氏物語』夕顔巻にもこの歌が引かれている。(3)、(4)などでもこの歌については言及されているが、坂口氏はこの言葉を男の発言だとしている。もとの歌が頼る身のない女性によるものであるから、ここでは女の発言だと解釈する方が適当だろう。
(12)(3)に同じ。
(13)(9)に同じ。
(14)(4)に同じ。
(15)これら日本における蘇武譚の受容については、黒田彰「蘇武覚書――中世史記の世界から――」（「文学」五十二号　一九八四年十一月）に詳しい。黒田氏は、『平家物語』の蘇武譚の背景には中世特有の汎蘇武理解というものが想定できるとし、日本においては、『漢書』の蘇武伝を源としながらも、中国の類書を引き金に蘇武伝承が展開していったとしている。
(16)以下、三輪山伝承の中でも古い『古事記』の概要を挙げる。「活玉依比売のもとに素性の知れぬ見目麗しい男が毎夜訪ねてきて、二人はやがて契りを結んだが、幾夜もしないうちに活玉依比売は子供を身ごもった。夜にしか姿を見せない男を不審に思った父母の知恵により、娘が男の裾に苧環の麻糸をつけた針を刺して朝を待つと、糸は外へと向かいただ三勾のみ残るだけだった。麻糸を辿り尋ねると、糸は美和山の神の社の前でとどまっていたので、男が神であったと知れた。」おおよその話の流れは蛇婿型と同じであるが、対象が神であるためか異類の死などは描かれない。
(17)御伽草子の狐女房譚で例を挙げれば、『いなり妻の草子』では子供の誕生が描かれていない。
(18)『日本霊異記』第二縁からして「狐の直」の始祖説話としての性質を持ち合わせている。また、有名な「葛葉狐」の伝承も安倍晴明出生譚として語られることが多い。
(19)御伽草子の狐女房譚で例を挙げれば、『木幡狐』は子別れの要素が比較的大きく取り扱われている。
(20)(3)で指摘されているほか、市古貞次「異類小説」（『中世小説の研究』一九五五年十二月　東京大学出版会）でも「雁は平安朝以來、最も文學の素材となった鳥であるといってよい」と述べられている。
(21)(3)に同じ。
(22)(20)の市古貞次「異類小説」（『中世小説の研究』）に同じ。